

門司松ヶ江病院支部今昔

アルコール依存症への福音 院内断酒会の誕生

当院にアルコール依存症者に対する集団精神療法の役割を果たす、断酒会方式の治療グループが誕生して、今年で四十一年を数える。

このグループの立ち上げに際し、院長は、当院開設以来七年間のアルコール依存症治療の試行錯誤の経験から、治療スタッフを柱とするグループとせず、九州で初めて断酒会を立ち上げられた。当時の北九州断酒友の会の会長、末永豊紀氏の指導を受け、地域断酒会と同じような形態のグループの結成をめざした。

当時の精神病院事情からは考えられない、夜間の病院施設の外部への開放を断行。退院後患者さんが直面する、昼間は職場で働き、仕事が終われば断酒会へ足を向けるという経験を、入院中から持つて貰おうと考えた。

この事は、治療の柱として今日まで重要な考え方として、変わる事なく受け継がれてきた。

しかも、断酒会のめざす会の運営目標である、自主、自立。酒害者の酒害者による、酒害者のための会をめざして、入院中の患者さんをグループのリーダーとした。

そして、組織としても、病院の治療グループでありながら、北九州断

酒友の会の支部として加入、門司松ヶ江病院支部が誕生した。この事の意味も大きい。他の病院では院内断酒会として全断連に加盟しているところもあると聞く中で、病院依存を助長しないためにも、退院者を病院が抱え込まない姿勢を明確にすることで、退院後は地域断酒会に根をおろして、自主と自立と自律とを果たせるべく後押しを始めた。当時の院長のアルコール依存症患者さんへの思いと姿勢を機関紙『断酒松ヶ江』の第十号、昭和四十三年十二月発行より引用してみます。

断酒友の会は、昔のおとぎ話のように、「開けゴマ」という言葉で、断酒をポンと成就させる魔法の絨毯を皆さんに与えられるものではないかもしれません。

皆さん方が、酒をやめられず、酒乱を行うのは、酒を売り、そして祝い事で飲酒の風習がある社会環境が悪いためではなく、問題はあなた自身の心と体質にあるのです。まずこの事をはっきり理解しなければなりません。

断酒という目標に向かって闘うのは、あなた自身なのです。我々医師に出来るのは、ただ敵である酒なるものがあなたにとって、どんな恐ろしい魔力を持ったものか情報を流し、あなたの作戦計画に

支部長 伊藤博明

用意をうながし、どちらに進んだら良いか判らないような時に、少しばかりアドバイスをしてあげるという程度です。

後は、皆さん方自身の足で、進んで行かねばなりません。そこでまず、一生懸命頑張ろう、断酒というこの事一筋に生き抜こうという強い意志を持つことです。

人には、もともと生きる事に対する強い意欲があります。どんな知能の低い人達でも、驚くほどの粘り強さを持って生きていこうとする意欲を見せます。

しかし、その生き方が、あなた方の過去のように酒害者の生き方ではいけません。もっと意義のある、豊かな生き方をしたいと、あなた方の人間としての良心は願っています。しかし、ただ願っているだけでは何も手に入れることも、また断酒の目標に近づくことも出来ません。

断酒の目的を達成するために、まず強い意志を持って道を進むことです。意思のあるところには道があります。例えば或る目的地に行こうとする人が、脚の骨を折ったとします。骨折を意思の力だけで治そうとしても、それは無理なことです。脚が折れたままでも、強い意志をさえ持ち続けて進めば、目指す場所へ行き着くことはでき

るものです。目的成就のためにはこのように意思の力は非常に大切なものです。

そして、現在完全断酒十年以上を継続し、各地断酒会で活動中の方々が三十数名おられますが、その方々は言うに及ばず、完全断酒四十一年の浦山惣三郎氏にしても、断酒一カ月から始められ、その努力を認め断酒表彰を始められた院長の患者さんへの思いを、再び『断酒松ヶ江』第十六号、昭和四十四年六月発行より引きます。

私達の松ヶ江病院支部の例会で、断酒賞を授与するようになってから一年経った。

この是非については、いろいろとご批判と評価の声があったが、断酒一カ月から三カ月の間に失敗する人が多いので、何か良い方法はないだろうか、と、支部の役員会での研究課題が会員の方から出されたのに対して、入院のために家庭から離れたり、単身者の方も多い病院の会員には、すぐ側に居られない家族に代わって、私が月間断酒の努力に対して、賞賛と激励の拍手を、せめて贈ってあげたいということから始まったものです。私自身、断酒はその人の心の中の静かな革命であるべきで、断酒し



ている事を認めてくれない人があつても、その人に怒りを感じたり、まだ信用してくれないと詰りたりするべきものではないし、表彰の形など、不要、有害のものではないか、そんな表彰の形は、退院して社会に入れば、求められないものであるからと考えますし、また、支部の会員の断酒推進の原動力は、献身的な末永会長はじめ、他支部の方の友情に他ならぬと考えられています。しかし他支部の方からのご批判を頂きながらも、今しばらくは親馬鹿表彰を残しておきたいと考えています。

真の断酒人とは、『人を助けて、己が生きる断酒道』の標語の如く、院内の例会、研修会は勿論のこと他支部の例会にも出席し、真心からの体験発表をし、支部の会員の世話をし、最終的には末永会長や病苦をおして尚、奉仕を続けておられる松村全断連会長の姿に近づくとことである。

このようにして、門司松ヶ江病院に新しい治療方法として、断酒会方式の集団精神療法が定着していったのである。

断酒会の運営には援助はするが口出しはしない

運営には援助はするが口出しはしない、は院長がたえず言い続けてこられた言葉で、地域断酒会と同じような例会、研修会をすすめて行く上で、非常に大切でありがたいことである。

初代支部長高田雅男氏は入院中から支部長として活躍してこられた。県外各地の大会、断酒学校等への出席は、入院中の患者にとつて大きな負担であり、創設間もない会の運営にもかかなりの経費が必要であったが、そのような面にも院長は強力な援助を惜しまず、支援を続けていただいた。

院長は院内の例会には勿論しばしば出席されました。また、当支部の断酒者第一号の浦山惣三郎氏を中心として、北九州断酒友の会・関門支部が昭和四十三年十一月三日に発足した時には、強力な退院者の受入先が出来たと、診療を終えて夕食もとらずに、自分で車を運転し、看護課の管理職を同行し、夜間例会に応援出席をされた。

支部の自立を目指す意味もあつて、徐々に直接的な支部運営や例会場への関わりを減少していかれ、現在では毎月第三日曜日に行われる支部の月例会には必ず出席して頂き、毎月断酒記念表彰をして頂いている。

支部の運営や、例会の司会は酒害体験者にまかせる。

支部発足と同時に当時入院中の初代支部長高田氏は、退院後も支部長として十八年間支部のお世話をしてくられた。その後筆者が引き継いで二十三年間その任を続けさせて頂いた。

その間、他の病院関係の先生方やアルコール問題関係者会議などで、当支部の運営のあり方や、現状を話すにつけ、支部の運営や例会の司会

を酒害体験者にまかせるのは長続きしないだろう。やはり、他の職員がいつ交代しても出来るようなシステムを作り上げるのが良いのではのご意見を頂いた。

筆者も、なるほどその通りだと思つたが、もう少しもう少しと思ひながら、二十三年が過ぎた。

自主・自立・感謝報恩の活動

現在、当初の目的、支部の自主自立を半ば達成できたのではないかと思う。経済的な面から見ると、発会当初は多大な援助により成り立っていたものが、数年後には会費での運営が可能となり、十年くらい前からは、支部会員からは会費は本部納入分のみ徴収し、支部の運営費は、例会に来て頂く支部のOBや地域断酒会員の皆様のご寄付で充分運営できるまでに成長しました。

断酒会による回復

断酒会では 自分のことを自分の言葉で 飾らず話したい。この道は 自分の不幸を縁として他人の幸せを 願う道
この二つの言葉は、当支部の合言葉である。

アルコール依存症は身も心もスタスタになり、家族全員を巻き込んで疲れ果て、途方に暮れる病気である。当支部に入会してくる人々は、断酒会に出席して、癒されて、充分癒されて、やっと気付きがあり、大勢の断酒会の仲間を支えられて、やっと

回復への行動が始まるのである。病院では、医師と治療スタッフによって、荒んだ心をゆっくりと時間をかけて耕して、そこに主治医は断酒の種をそつと蒔きつけて下さる。充分に耕された心に蒔く種のみが、断酒の芽吹きとなるのです。

その芽が双葉になる頃に、退院し地域断酒会に入会となります。断酒会の皆さんは、その双葉に水をやり肥料を与え、霜よけをし、或いは強力な防風林となつて、やがて自らが防風林の役割を果たせるように育てて下さるのです。

筆者は、今日も椅子を並べて、皆さんのお元氣な笑顔を頂けるのを楽しみに、静かに待っています。

(ここで院長と書いていっているのは、現名誉院長の事である)

門司松ヶ江病院 治療の理念

精神障害という理解されがたい病気で悩んでいる人達との心のふれあひを通じて、その純粋な心、ひたむきな努力を受けとめ、「自由と尊厳と生産性の回復」に、全職員あげて精いっぱい援助をし、病院の門を社会に大きく開いて奉仕いたします。